

情報共有の会議時間が50%減少。 プロジェクトを成功に導くための支援機能が集約された「Wrike」で、 コスト最適化と組織力強化を達成

株式会社シキラボは、モバイルゲームやWebサービス、POS、動画配信など多方面の開発プロジェクトを請け負い、さまざまな課題解決を提供する企業です。同社が手がけるプロジェクトの管理には、全面的にコラボレーティブ・ワークマネジメント・プラットフォームである「Wrike」が用いられています。今回、株式会社シキラボ 代表取締役社長 山本翔太郎氏に、Wrike導入のメリットや効果などを伺ったので、その内容を紹介します。

開発現場の悩みに対する 最適解として定着した「Wrike」

株式会社シキラボでは、常にプロジェクトが同時並行で進んでおり、各プロジェクトで取り組む内容も、人数規模も様々です。また、プロジェクトをまたいだ人員配置や、リモートワーク人員の増加といった複雑さもあり、現場からは様々な悩みが発生していました。

「こういった悩みに対して、何かしらの管理システムが必要不可欠でした。以前は、国内でシェアの高いRedmineやAsanaといったツールを利用していました」(山本氏)

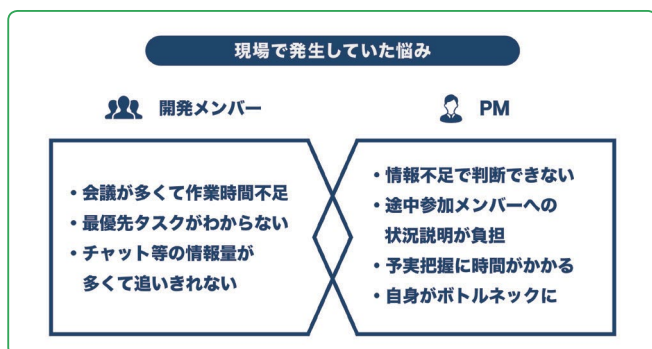
同社では、ツールを用いてマイルストーンを定め、各自のタスクを洗い出し、進捗管理をしていく文化がWrike利用以前からありました。しかし、それでも次のような課題は残っていました。

- 管理品質が、プロジェクトマネージャー (PM) の能力に依存しやすい
- 一部の開発メンバーに負担が集中
- 規模が大きくなるほど、放置タスクや抜け漏れタスクが発生

「ちょうど導入を決めた頃は社員数が増加しており、プロジェクト管理の重要性がより高まっていました。早期に整備しないと、管理コストの肥大化に歯止めがかからないという危機感があり、固定観念を捨てて他のツールも試すことにしました」(山本氏)

何気なく試してみたWrikeが、必要条件を満たしていることに加え、独自の斬新な機能も持っていることを知り、山本氏は、これが最適解と感じ、すぐに社内浸透を図ることにしました。

「最初の1か月は、仕事の流れが分かりやすい管理部門のみに導入しました。開発メンバーには、経費精算や名刺の発注など、不可欠な申請をWrikeの『リクエスト』機能からのみ受け付けるようにすることで操作に慣れてもらい、その後はトップダウンで、開発部門まで一気に導入を進め、2か月目には定着しました」(山本氏)



現場でよくある悩み。この悩みが、開発生産性の低下を招いていた



株式会社シキラボ 代表取締役社長
山本 翔太郎 氏

●企業プロフィール

「70億人のココロにワクワクを届ける」をミッションとし、様々な企業の依頼に応える開発会社。
既存エンタメやビジネスに対し、IT技術セットを掛け合わせることで、価値ある体験を届けています。

●導入製品

Wrike Business プラン
Wrike Resource

コラボレーティブ・ワークマネジメント (CWM) ・プラットフォームのWrikeは世界中で2万社以上の顧客に導入され、200万人以上のユーザーが日々の業務に使用しています。日本国内では900以上の企業、組織が導入しています。

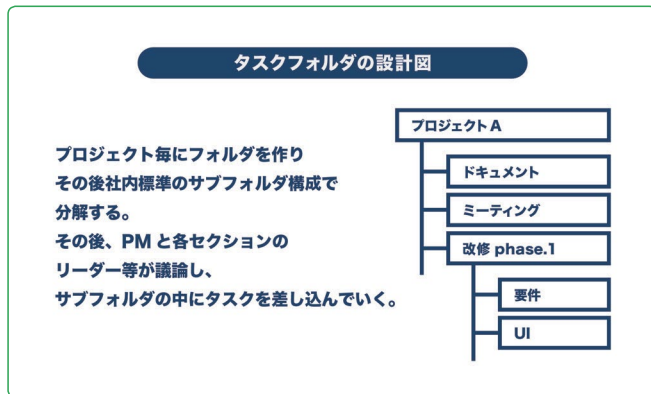
●導入効果

- プロジェクトメンバー間での意思疎通が円滑になり、会議に要していた時間が大幅に削減
- プロジェクトマネージャーによる作業見積りの精度が上がり、スケジュール管理や労務管理の強化が図れた
- 全社の仕事をフォルダ構造にまとめることができ、全体の把握や、過去の仕事の参照も容易になった

Wrikeを選んだ4つの理由

理由1: 「タスクフォルダ」で、複雑なプロジェクトを直感的に分解

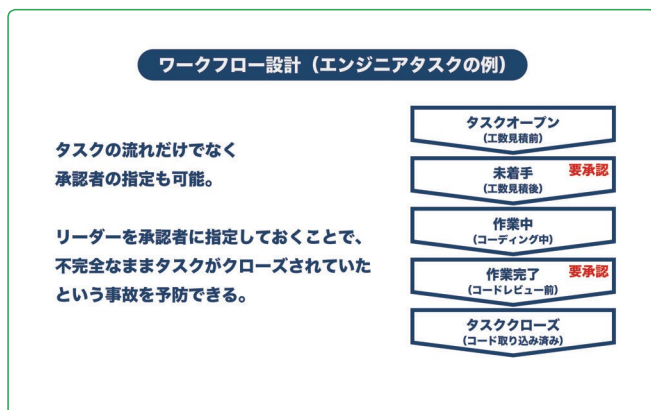
Wrikeでは、子タスクとは別で、タスクを束ねる単位として、「フォルダ」「プロジェクト」というものがあり、ツリー構造を持たせることができます。「タスクを、意味のあるまとまりで分解し、構造化して管理を一元化することで、全社的なマネージメントを行う際に役に立ちます。さらに、組織図とマッピングさせることで、責任境界がはっきりし、他の部署が担当しているタスク状況も把握しやすくなります」(山本氏)



理由2: 「ワークフロー」で業務の流れを定義

同社では、新規案件開始時に、職責単位でタスクのサブフォルダを作ります。「要件定義」「UIプロトタイプ制作」「コーディング実装」「テスト」といった具合です。各サブフォルダには、個々にデフォルトワークフローが適用できます。結果、各タスクには、自動で最適な業務の流れが適用され、想定とのずれが起きにくくなります。

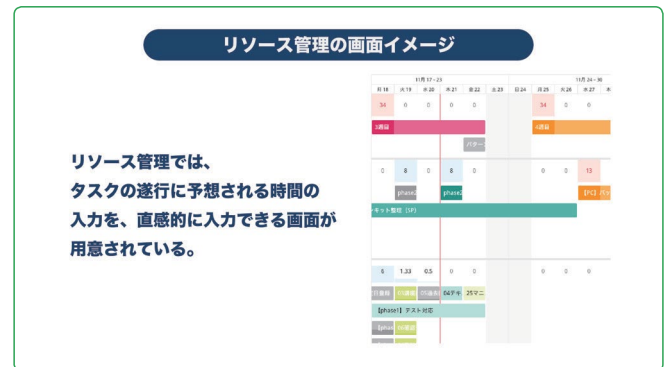
「ワークフローが充実すればするほど、仕事は見える化され、安定し、組織として強くなっていけると思っています。作業時間の見積もり精度も上がり、予実のズレが減りました」(山本氏)



理由3: 「リソース管理」でメンバーの業務負荷を最適化

社員の一部に負担が偏ってしまうことを予防する為、事前にタスクの作業工数をマネージャーと見積もり、1日8時間以内になるように各人に割り振ることも、同社のPMの役割です。この工数の見積もり・割り振りをサポートするのが、「リソース管理機能(有料オプション)」です。PMは、リソース管理画面に表示される各メンバーの稼働状況と、エンジニアリーダー等からの工数見積もりを参考にスケジュール管理やメンバーへの仕事の割り振りを行っています。

「リソース(人員)の工数管理は煩雑な作業で、管理が形骸化している現場は多くあります。しかし、WrikeのUIは直感的で使いやすく、PMの負担になることもほとんどありませんでした」(山本氏)



理由4: 複数の管理ツールをWrikeに集約しコスト削減

これまで、タスク管理、ファイル管理、ドキュメント管理、工数管理、スケジュール管理など、複数の管理ツールを併用することにより、それぞれのツールにコストが発生していました。Wrike単体では割高感があったというが、他のツールを削減できたことで、全体のツール利用料は20%削減することができたといいます。

ただのタスク管理を超えた、組織力強化ツール

全社での活用が進んだことで、スタッフが「今日は何をすべきか」に迷うことが減り、集中する時間が増えました。議論の発散が減り、月40時間必要とされていた進捗確認等の会議が50%削減できたといいます。数十人規模の開発プロジェクトにおいて、この工数コスト削減のインパクトは、ツール導入コストを大きく上回ることでしょう。

「組織内での行動が、体系的に記録され、可視化されているので、過去の履歴を追えば、どんな人材が関わってどう進めていったかを事細かに知ることもできます。途中からプロジェクトに加わったメンバーに対しても、情報格差が少なく、追いつきやすい環境にすることができます。また、課題にぶつかる度に、ワークフローを補強することで、成功の確率を高めてくれます。歴史に学び、知見を積み重ね、実現性の高い計画を立てられる強い組織になったな、という実感があります」(山本氏)

株式会社シキラボのように、メンバーがより作業に集中できる環境を実現し、プロジェクト成功率の高い組織を作り上げていきたいと考える企業にとって、Wrikeは最高の手助けをしてくれるでしょう。